

新宮山彦ぐるーぷ第1943回

鳥海山・羽黒山・月山・蔵王熊野岳の山行報告

◇実施日；2017年08月25日(金)～08月28日(月)

◇参加者；川島 功、沖崎吉信、児嶋道夫、大江加予子、大江

徳子、畑林清子、前田 正、石橋哲郎、石橋隆子、

上村洋司、上村和美、樋口義也、高階美音子、高階

鈴子、奥村順夫、竹中卓治、三井幹雄、椎木 堯、

椎木照子、濱野兼吉、梶野照雄(27～28)。計22名。

山行前にいつも今回は登れるのであろうかと、不安に駆られる。鳥海山は07年8月12日に鉾立から頂上を越え、祓川におりた。その時の印象は暑くて喉が渇き水をがぶ飲みしたこと、山頂のゴツゴツ大きな石の塊が重なり合っていたという記憶しか残っていない。

さて、今回も水は途中ででも調達できるがたつぷりと持った。

鉾立・象潟口登山口ここは標高1150m。東北の山は森林限界が低いうえ、冬の厳しい環境のためか、樹木は背の低いまま風雪に堪え遅しく横に成長している。当日の天候は9時頃までは曇天。

6時25分に出発。石畳の登山道を登りはじめる。霧がかかっているが、視界はまだきいて登るには影響はない。畑林さんを先頭に隊列をつくり登りはじめる。登山路は流石みちのくを代表する百名山「鳥海山」良く整備されている。

休憩も適当に入れながら六合目「賽の河原」には7時40分に到着。鳥海山は深田久弥の「百名山」でもあるが、また田中澄江の「花の百名山」でもある。代表する花は「チョウカイフスマ」この花は山頂付近のガレ場に咲くそうである。「賽の河原」から「御濱」までの登山路にはチョウカイアザミ、タイギボウシ、ハクサンフウロ、ミヤマシシウド、ミヤマウスユキソウ、ハクサンイチ

ゲ、チングルマ、コシジオウレン、オンタデ等の花々が見られた。

御濱に到着するころには、霧がひどくめがねに水滴となつて張り付き視界がきかない。手ぬぐいでレンズをぬぐうがすぐまた曇る。御濱小屋で休憩をしながら出発の頃合いを窺うが、なかなかタイムングがとれない。

出発を2度試みるが、風は容赦なく前を遮り歩くことさえままならない。大きな石を抱きかかえ、風の止むのを待つがとも先へは進めない。その間誰かのザツクカバーが、宙に舞い飛び去る。

台風時、あるいは暴風警報の出た山行の経験があるが、今回はそれにも増して比較にならないほど風が強い。まさに暴風である。風の瞬間の間を置いて小屋に戻る。

リーダー川島さんの判断で登頂を断念し下山することになる。私はホット安堵する。山は逃げない、また来いと言うことである。

強烈な風と霧、熊野の山では経験することのない貴重な体験が出来た。無事これ名馬ではないが、元気であれば再度の挑戦もできる。何事もなく鉾立登山口に戻った時、リーダーには決断力や個々の参加者の能力、体力、技術、精神力等をきちんと把握し、的確な判断をする力量が求められることを改めて認識した。

早く下山したので羽黒山に廻ることとなった。

羽黒山はお宮さんの関係の秋の峰入りが始まるらしく、白装束行者一行の行列が、法螺貝の音を吹き鳴らしながら進むのを車窓からながめることができた。

山門から本殿までは二千四百四十六段の石段を登らねばならない。樹齡三百年から五百年の杉の巨樹が林立し、霊場という感じで心が落ち着く。私は椎木さんに修験と煩惱について伺う。「山に入り修行中には煩惱は取り払われ、修行が終え下界に返ると煩惱が現れてくる」とのことであった。

松尾芭蕉は、「涼しさや ほの三日月や 羽黒山」と句を詠んでいる。

羽黒山は吉野金峰山寺とも縁があり、南北朝時代には協力関係

にあったようだ。五重塔をながめながら木造建築のあと、当時の棟梁達の技術力のたかさ、千年を超えてもなお凜として建つ、木造建築のしなやかさや強靱さ建築技術の高さを感じ、あらためて木の文化を社寺仏閣だけでなく、一般の建築に生かす方法を継承せねばと思った。

羽黒山は女性にも開かれ、月山や鳥海山のように女人禁制ではなかったために、幅広い信仰が広がったのかも知れない。ちなみに羽黒山を代表する花は「ミヤマヨメナ」である。

ここも明治の廃仏毀釈で、山内には百十三の堂宇が八十五棟が破壊されたとの事である。

月山

月山八合目駐車場登山口を出発。振り返れば昨日の暴風がウソのように、鳥海山はなだらかな稜線を広げた山頂を見せる。

月山の弥陀ヶ原の草原の広さは東西2・5^キ南北3^キに広がり、なだらかな草原が山頂まで続く、頂上までの距離は約5^キ。立山の弥陀ヶ原にも劣らない草原である。登山口は御田原とあるからここからが神の領域ですよ、ということなのだろう。周辺には大小の池塘が点在し、オニヤンマをはじめトンボが多く飛び交って、蝶もよく見られた。

八世紀の延暦4年には、熊野権現を勧進したと山形県史に書かれ、出羽三山も熊野三山を元にして付けられたのかも知れないとひとり勝手に想像する。

この地には穴の中に生身を埋められる成仏があったらしい。信仰の極致がなぜそのような自己虐待を生むのか、田中澄江は理解に苦しむという。出羽三山にはこのような苦しみへの陶醉を誘う妖気が漂っているのかもしれない。と記している。

チシマザサの中の登山道には、ボランテアで登山道に侵入するチシマザサを刈り取っている方もいて、多くの人々の努力によってこの信仰の山も支えられていることを感じる。なだらかな稜

線に沿って進む登山道は、山頂がすぐ近くにあるように思えるが、一の岳、ここが山頂かと思うオモワシ山、行者返といくつも山頂が続き、最後のモックラ坂を登ると月山(1979・5m)山頂だった。山頂の神社ではお祓いをして祈禱を受ける。勤行をという声もあがったが、ここは神仏習合ではなく神道で、却下ということになる。お札をいただく人もいたが、私は神には興味がなく昼食場所の広場に向かう。

昼食後、児嶋さんのコーヒーを御馳走になり、記念写真を撮って全員無事下山。

因みに月山も深田久弥の「百名山」、田中澄江の「花の百名山」でもある。花は「ウズラバハクサンチドリ(ラン科)」で今回はこの花に出会うことはなかった。わたしは久方ぶりにであったニッコウキスゲの花が印象に残った。

月山から帰路、バスが故障するというトラブルもあったが、これもご愛敬。大変心に残る思い出となった。

蔵王山

今回の登山は信仰の山を巡る山行でもあり、また、熊野に関連のある修験道との関わりのある山旅でもある。遙かなる昔、熊野比丘尼や修験者達が陸奥の果てまでも、熊野から徒で勧進をしてこの地を巡った。

「信仰とは何か?」「牛王札」を持ち熊野信仰を説いて廻り、情報も伝えた。また、陸奥からも熊野を何回か訪れた記録も残っている。白装束は死を覚悟しての旅立ちでもある。私には何がそこまで駆り立てたのであろうか、信仰力のエネルギーに圧倒される。登山口から馬の背のなだらかな稜線に沿って歩く。右手眼下にエメラルドグリーンに輝く御釜を眼下にながめながら、最後は左に折れ坂を登れば約1時間で山頂の熊野岳(1840・3m)である。山頂の手前に熊野神社があり、役行者の石像や金峰山寺等の石碑が並ぶ。山頂の三角点に手をかざし、登頂を祝い今西錦司

流山頂にかける万歳を三唱する。

児嶋さんのコーヒーや皆さんからの差し入れのお菓子で休憩をし、熊野神社で椎木さんをお願いし勤行する。

私は避難小屋に回り帰路につくことにする。避難小屋の下に盛りが過ぎたコマクサがあった。ガレ場の女王コマクサ。この花に会えるとは思っていなかっただけに嬉しかった。

最後、刈田岳（1767m）へ、三角点は神社のそばにあるようだが時間の関係で、駐車場に戻る。

鳥海山こそ頂上を極めることができなかったが、東北の山を堪能することができた楽しい山行であったと同時に、撤退することの勇気も大切であるという貴重な体験ができた。修験の山、民衆が神とあがめてきた信仰の山。登れなかった山は、また機会を見つけて登ればいいのだろう。山は動かず待っていてくれる。

（濱野 記）